

## ○小松原

岩代 服部すめせん子

「俊夫様！」

小松の影の處々に思ひに瘦せし身の影を、細長う交へてそゞろ歩きの俊夫が後に、美しきさはれ密かの呼聲捕ひ得ざりし想より我に回て振り向く俊夫が傍にそと走せ寄つた色白の人。小豆色矢飛白の袷一つに、水淺黄色の帶を、裕かな背に小さくぴつたりと結んで、眞白き襟のさて品も宜う。

「千賀さんでしたか」

俊夫は褪せたる其顔に、大人な氣もなく紅葉を散らした。大島緋の丈長き羽織の肩を張らして、兩手を白の兵古帶の間に差し込んで、うつむき見る芝生の上に夜露重げの紫葦一もと。無言に立ち止まれば、千賀子も無言に、其福々しき手に摘みあげてそと接吻つ。

「あの俊夫様……奥様を可愛がつてあげて下さいまし」と當突に、語尾をやゝきつぱりと言ひ出でた。驚

き顔に、俊夫は千賀子の顔を見入つてまた差しうつむいた。

「私、突然にこんな事申上げて……でも何から先に申上げて宜いのやらわからないのですもの……」

「私存じて居りますの、貴君が奥様にお辛らくなさるのを……毎朝婆やさんに伺つて能く存じて居ります。お可哀そうぢやありませんか御容子と言ひお心立てと言ひ是と言つてお惡い處の無いあの秋子様を、どうして彼んなに冷淡になさるんでせうつて婆やさんがいつも私に口説くのでございます。それは貴君がお心に召さなかつたのを何したのは存じて居りますけれど……俊夫様女と言ふものは弱いものでございますよ 一生を頼む夫に素氣なくされちやあ……まあ秋子様のお心はどんなでせう……俊夫様！何卒可愛がつてあげて下さいまし」

「……」

「私何もこんな事を、貴君に申し上げずとも……とお  
思ひなさるでせうけれど私、秋子様がお可哀（かあい）そうでお  
可哀（かあい）そうでこんな差出がましい事を申上げるので御座  
います。またそうして戴かなければ私の爲にも……」  
「俊夫様……實は私はあの桑原さんから疑はれて居  
るので御座います……」

「え？」と口惜（くやく）し氣（げ）に唇（くちびる）を嚙（か）む千賀子の白（おしろ）き面（おもて）を、愕（おどろ）  
然俊夫は見入った。

「いゝえ親御さんの情として決してお無理ではござい  
ません。私の宅（たく）は貴君（あなた）のお隣（となり）、常に足繁（あしむ）く出入りを  
して居るのですもの……それに貴君（あなた）が秋子様（あきこ）に冷淡（れんたん）  
になされば……」

「……」  
「私は決して怒りませんし怨みもいたしません、口惜（くやく）  
しうは御座いますけれど私は潔白（けつぱく）なことは神様（かみさま）がご存  
じで居らつしやいますもの……たゞ私の身の疑（う）ひを

晴（は）らして下さるのは貴君（あなた）のお心一つでございませ、貴  
君（あなた）がお優（やさ）しくなさる、それ一つで御座います」  
「……」

「俊夫様！貴君のお心は私（わたし）能（よ）く存（ぞん）じて居（を）ります！」  
後（お）れ毛（も）諸（もろ）共（ども）、白（おしろ）きハンカチを嚙（か）みめ（め）めて月に立つ影（かげ）の  
やがて俄（が）破（は）と芝生（しば）に伏（ふ）して、

「私もお慕（も）ひ申（ま）して居（を）りました！」

「えつ！千賀（ちが）さんも……」

松（まつ）並（な）木（ぎ）を通（と）る馬（うま）の鈴（すず）月（つき）に冴（さ）えて、誰（たれ）が流（なが）しゆくか寂（さび）し  
の歌（うた）。

君（きみ）と別（わか）れて松（まつ）原（はら）ゆけば……

松（まつ）の露（つゆ）やら涙（なみだ）やら……

遠（とほ）き野（の）寺（でら）の鐘（かね）の響（ひび）消（き）えて、月（つき）白（しろ）し。

「俊夫様（さむらいさま）！奥（おく）様（さま）を可（た）愛（あい）が（た）つてあ（あ）げて下（くだ）さいまし！」

底本…「女子文壇」明治三十九年六月

テキスト入力…小林 徹

公開…令和六年八月六日

リンク…[水野仙子作品年譜](#)